



柑橘トップ産地の原動力 「切磋琢磨」(下)

ゲスト/小笠原栄治 (愛媛県JAにしよう 代表理事理事長)

第40回ゲスト

愛媛県JAにしよう 代表理事理事長
小笠原栄治



おがさわら・えいじ

1963年愛媛県生まれ。1982年西宇和農業協同組合に入組。伊方支店で共済課課長、伊方支店金融課課長を務め、総務部総務企画課課長、伊方支店支店長、内部監査室室長を経て、2016年総務部長、2019年参事。2022年から現職。農業振興と地域活性化に向けて、京浜市場などでのミカンのトップセールスに力を入れている。

●インタビューとまとめ

三重大学名誉教授
京都大学学術情報メディアセンター研究員
石田正昭



いしだ・まさあき

1948年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は地域農業論、協同組合論。元・日本協同組合学会会長。三重大学、龍谷大学の教授を経て、現職。近刊書に『JA女性組織の未来 躍動へのグランドデザイン』『いのち・地域を未来につなぐ これからの協同組合間連携』(ともに編著、家の光協会刊)。



* 前回の記事は [コチラ](#) から

柑橘トップ産地の原動力「切磋琢磨」

柑橘トップ産地のJAにしよう。2024(令和6)年度の柑橘の平均単価は400円を超え、長期低迷から脱した感があるが、予断は許さない。西宇和の知名度とブランド力向上に向け、大手広告代理店を通じて積極的な販促活動を行っている。「やっぱりみかんづくりが好き」という生産者の負託を受けた数々の取り組みを小笠原理事長に語ってもらった。

■ 放任園は出さない、出させない

石田：中期経営計画(2022～2024年)の「次世代総点検運動」では「農家園地台帳の作成」が掲げられています。これはどういうものですか。

小笠原：農家園地台帳は世帯主の名前、園地の場所・面積、各園地の品種・樹齢・本数のほか、アンケート調査から得られた後継者の有無や将来の園地利用の希望などを書き加えたものです。西宇和地区の構造改善を検討していくときの基礎資料となるものです。



石田：行政や農業委員会が進めている「地域計画の作成」との連携はどうでしょうか。

小笠原：農地の権利移動については農業委員会を通じないとうまく進まないのは事実です。ただ地域計画の作成は行政が独自に取り組んでおり、JAと完全な連携がとれているわけではありません。現状では、行政の担当部署にJAの営農経済部農業振興課が出向いて、将来的にどういう絵を描くのが望ましいかを協議しているところです。

たとえば、八幡浜市国木地区には富士柿(蜂屋柿の変種)の園地が65haほどありますが、園主の高齢化や低収益性などの問題があって、温州みかんへの転換をめざしています。再来年度(2026年度)から農地中間管理機構を通じて大規模整備を行う計画になっていますので、そうした機会をとらえてJAも積極的に参加・参画していきたいと考えています。

石田：めざすところは同じですから、協力して進めていってほしいですね。もう一つ、ＪＡでは「放任園伐採事業」をおやりになっています。これはどういうものでしょうか。

小笠原：放任園対策費として、ＪＡが１０ａ当たり３５，０００円を出して放置されたみかんの木を伐採しています。柑橘類は伐採しないと病虫害の発生源となりますので、周りに迷惑をかけないための措置です。伐採したあとは雑木が生えてきますが、そのほうが放置するよりもいいのです。園主の高齢化や離農などの理由から全園地の１～２％程度ですが、毎年放任園が生まれています。

石田：労働力確保という点では、毎年たくさんのアルバイトが西宇和にやってきますね。

小笠原：そのとおりです。近年アルバイトが増えて、毎年６００人くらいが全国各地からやってきます。３０年ほど前に真穴で自分の家の倉庫を改造して、アルバイトの宿舎をつくったことが始まりです。アルバイトのなかには１０年以上も通うリピーターがいて、作業内容も熟知していますので新規就農者となった人もいます。Ｉターンの募集もかけていますが、アルバイトから就農するほうが定着率は高いようです。

現在では、八幡浜市のほか、伊方町でも小学校や保育所を改造して「マンダリン」という名称の宿舎を整備し、アルバイトの受け入れ体制を整えています。マンダリンの管理運営はＪＡが行っており、こうした取り組みが功を奏してアルバイトが増えているのです。

石田：みなさん日本人ですか。それとも外国人も？

小笠原：みなさん日本人です。外国人は共選場で働いてもらっていますが、アルバイトは日本人だけです。



校舎を生かした宿舎「マンダリン」。多くのアルバイトを受け入れることができる

出身地は京阪神に限らず、関東からも多いですし、北海道からも来ています。アルバイト先も西宇和だけでなく、北海道（畑作）、長野（野菜）、沖縄（サトウキビ）など、リレー方式で全国各地を回っています。

お金を稼ぎながら全国を旅するという自由人のライフスタイルといってよいでしょう。一企業のなかで働きつづけるよりも、自由な時間に、働きたいときだけ働くという人たちが結構いることを表しています。

リタイアした人もいますし、若い人もいますが、リタイア組はご夫婦で来られる方が多いようです。みなさん車を運転して移動しています。日常の買い物も自

分の車が必要ですからね。

■ 産地の名声が若者を呼び寄せる

石田：広報誌「たちばな」2024（令和6）年5月号に掲載されていますが、2024年度の新規採用職員12人のうち、6人が京阪神の出身者でした。これには驚きました。

小笠原：そのとおりで兵庫から4人、大阪から2人です。残念ですがそのうちの1人は体調を崩してリタイアせざるをえませんでした。ほかの5人は元気に頑張ってもらっています。

石田：それにしてもすごいです。

小笠原：マイナビで募集をかけると、J Aにしうわが柑橘の盛んなところだと分かるのでしょうか。日本一の柑橘産地で働きたい、販売したい、という希望をもって応募してきます。

石田：以前からそうでしたか？

小笠原：以前から愛媛県内や広島、岡山などの中国・四国地方の出身者はいました。地元の愛媛大学や松山大学には中国・四国地方からの学生さんが多いですからね。でも今回はこれらの大学とは関係なく、兵庫、大阪から来てくれました。やっぱり西宇和みかんの魅力が大きいように思います。

石田：農業系の出身ですか？

小笠原：いいえ違います。情報系の専門学校の出身者が多く、学んだことを産地で生かしたい、地域に貢献したいと言っていました。面接ではみなさんそれに近いことを言いますので、本音かどうかは分かりませんが…。

石田：（京阪神出身者は）全員が男性でした。地元の女性と結婚すれば地域に根付くことにもなりますし、将来人口の増加にもつながります。

小笠原：そのとおりです。西宇和から出ていく地元男性が多いので、ぜひ根付いてもらいたいです。



太陽の光を反射させて果実に当たるようにするマルチ被覆は労力がかかる。職員も農家に学びながら手伝っている

石田：男性職員はみんなマルチ被覆に駆り出されると聞きました。高品質みかんをつくる決め手になっているようですね。

小笠原：そうです。色であったり、糖度であったり、品質向上の決め手となっています。マルチ被覆からの反射光も品質向上に欠かせない要素です。水分を入れないので玉の大きさを抑制することに

もなります。今年度(2024年度)は裏作だったので、その差が顕著に現れました。

ただマルチ被覆は夏のいちばん暑いときに行いますので、とてもきつい作業です。加えて段々畑なので、マルチを敷くときもたたむときも足元がおぼつかない作業となります。園主も高齢化していますので、自分の労力だけでは限界があります。園主からはたいへん喜ばれています。

マルチ被覆は、日の丸から始まり、各地に広がっていきました。温州みかん全体の被覆率は、1450haの園地に対して300haの被覆ですから20%くらいですが、日の丸では50%くらいになっています。

温州みかに特化している御三家(真穴、川上、日の丸)では、単品生産なのでマルチ被覆に限らず収穫を含めて、農繁期に激しい労働集中が起こります。ですからマルチ被覆は品質向上に欠かせない作業ですが、園地拡大の制約要因にもなっています。

労力的に園地拡大は難しいので、その対策として、みかんの木の更新(理想的には20年生での切り替え)を計画的に行って、反当収量を増やす努力をしています。御三家には比較的若い園主が揃っているため、計画的更新の取り組みがとくに進んでいます。

石田：なるほどね。よく分かります。



みかんのブランド向上と販売力強化にも力を入れる。JAの流通センターでは豊富な種類のみかんが並ぶ

■「やっぱりみかんづくりが好き」

石田：正組合員戸数と正組合員数を比較すると、1戸当たりの正組合員数が多く、1.32人となります(2024年3月末現在)。これは女性・青年層の正組合員化が進んでいることを表します。

小笠原：合併前は1戸1組合員がふつうでしたが、合併後は定款に従って1戸複数組合員化を推進しました。90日以上に従事日数があれば、奥さんも子どもさんも正組合員になっていただきました。



女性部による柑橘を使った料理を掲載したカレンダーを作成している。二次元コードからレシピを読み取ることができる



女性部八幡浜支部では「みかんのある風景 写真展」をJA本店で実施している。掲示された風景写真が来店者を楽しませている

石田：理想的ですね。この取り組みが女性部や青壮年同志会の活発な活動につながっていると思います。

小笠原：ももとは「青壮年同志会」だけではなく、女性部にも「女性果樹同志会」という組織がありました。かつての〇〇柑橘組合、〇〇青果組合の名残りですが、合併後は、一般の女性部と一緒にになって「JA女性部」を名乗るようになりました。女性部ではとくに広報活動に力を注いでもらっています。

石田：それが「みかんマイスター」の登場だったり、「みかんツリー」の製作だったり、表彰事業「手作り加工品展」の開催だったり、女性部全12地区の柑橘レシピを掲載した「西宇和みかんカレンダー」の発行だったりするわけですね。それらを毎年おやりになっている。素晴らしいです。

小笠原：どこからこんな考えが出てくるのだろうかと思うくらい、創造性が豊かというか、発想がとにかく素晴らしい。こんな高いレベルの活動をやるのは、男性には無理です。女性って本当にすごいなあと感心します。

女性部や青壮年同志会の販促活動を含めて、首都圏での産地PRについては博報堂さんをお願いして、テレビのローカル番組やインターネットなどを通じて流してもらっています。関東エリアでの移動販売車による販促活動に加えて、有名大学や自動車教習所の若い人たちにも西宇和みかんを無料で配布しています。博報堂さんとのお付き合いは「うまいわ、にしうわ」の広告宣伝がきっかけでした。プロはプロです。企画がしっかりしています。

石田：ずいぶんお金もかかるのでは？

小笠原：決して安いわけではありません。ですが、出荷1kgあたりに換算すると約1.3円で、それほど高いものではありません。生産者のみなさんからは「どれほど浸透しているか」という問題が指摘されますが、これと同等のものを自分たちでやろうと思ってもできるものではありません。

生産者のみなさんには「トップ産地を維持するうえでの必要経費だと考えてほ



女性生産者みずから、歌と踊りでみかんをPR。10枚以上のCDも発売するなど、フレッシュレンジの活動は地元のテレビや新聞で紹介されている。

しい。産地PRは途中でやめたりせずに継続することがいちばん大事です」とお話ししています。始めてから10年以上になります。

石田：説得力がありますね。元気な産地でないと続かない話です。

それから『家の光』の漫画で紹介されていましたが、女性部のフレッシュレンジの歌や踊りも印象に残りました。みかんが売れないときの「悔しさ」をバネに結成されたそうですね。

小笠原：フレッシュレンジの活動も長いです。2005(平成17)年の結成ですから今年でちょうど20年になります。日の丸共選の岡本由美さんが代表を務めています。結成時は40代、50代の女性たちで構成されていました。その後、メンバーの入れ替えはありましたが、主力メンバーは現在も健在です。

とにかくみなさんエネルギッシュで、自作自演の歌を十数曲も持っています。岡本さんが作詞作曲、振り付けを担当し、CDも出していますし、YouTubeやInstagramでも発信しています。毎年、4月14日のオレンジデーには八幡浜港の道の駅「みなと」で歌と踊りを披露しています。

石田：まさしく「歌って踊るフレッシュレンジ」ですね。

小笠原：岡本さんに簡単ですからと言われて、わたしも踊りましたし八幡浜市長も踊りました。とても楽しかったです。彼女たちは「やっぱりみかんづくりが好き」という点で意見が一致しています。

(取材／2025年3月3日)

柑橘トップ産地に想定外の「雪害」



今年の2月、産地は大寒波に見舞われ、ハウスの倒壊などの被害にあった。農家の支援に力を入れている

2025(令和7)年2月上旬、日本列島は大寒波に見舞われた。愛媛県南予地方にも2月3日から5日にかけて大雪が降り、J Aにしゅう管内では伊方町から八幡浜市保内町、日土町にかけての一带に30cm近い積雪があった。みなのかん選、伊方かん選、みつるかん選に加入する柑橘農家57戸に被害が生じた。

倒壊したハウスは全壊、半壊合わせて99棟にのぼり、その多くは40年前に設置されたハウス団地内のものであった。栽培している柑橘の多くは収穫後であったが、高級品のせとか、アンコール、マーコットの一部に枝倒れや果皮障害などの被害が生じた。J A職員も急ぎハウスビニールの撤去に駆け付けた。

被害額はJ Aにしゅう管内で最大6.9億円と見込まれるが、3月3日現在精査中である。パイプの撤去費用、改植費用、ハウスの再建費用など、個々の被害の状況や生産者の将来の意向に左右されるところが多く、仮にハウスの再建となれば国・県の補助事業の導入が必要となる。